

^m
h

ハヤカワ・ミステリ文庫 <HM⑫-24>

侵入

ディック・フランシス

菊池 光訳

早川書房

訳者略歴 英米文学翻訳家 主訳
書「黄金」「横断」「直線」フラ
ンシス「蒼ざめた王たち」「真紅
の歎び」パーカー「陰謀」ウォー
レス（以上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

優 入

〈HM⑫-24〉

一九九一年八月十五日 発行
一九九二年十一月三十日 二刷

（定価はカバーに表
示してあります）

著 者

D・フランシス

訳 者

菊池 光

発 行 者

早 川 浩

発 行 所

株式会社 早川書房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田多町二ノ二
電話東京(三三五)三三一一(大代表)
振替口座番号 東京六〇四七七九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷・株式会社享有堂印刷所 製本・株式会社明光社

Printed and bound in Japan

ISBN4-15-070724-3 C0197

ハヤカワ・ミステリ文庫

〈HM⑫-24〉

侵入

ディック・フランシス

菊池 光沢

^m
h

早川書房

3044

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1991 Hayakawa Publishing, Inc.

BREAK IN

by

Dick Francis

Copyright © 1985 by

Dick Francis

Translated by

Mitsu Kikuchi

Published 1991 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by
arrangement with JOHN JOHNSON LTD.
through TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.

競走馬調教師の息子メリックと
WSVN局コォーディネーターの
ナンシイ・ブルックス・ギルバートに
愛情と感謝の意をこめて

侵

入

登場人物

キット・フィールディング	障害騎手
ホリイ・アラデック	キットの妹
ボビイ・アラデック	ホリイの夫。調教師
メイナード・アラデック	ボビイの父親
カシリア王女	馬主
ダニエル・ド・ブレスク	カシリア王女の姪
トマス	カシリア王女の運転手
ヴォーンリイ卿	《サンデイ・タウンクライア》紙 の社主
ヒュー・ヴォーンリイ	ヴォーンリイ卿の息子
ウィケム・ハーロウ	調教師
ダスティ	ウィケムの厩舎の厩務長
ジャーミン・グレイヴズ	馬主
オウイン・ワッツ ジェイ・アースキン	《デイリイ・フラッグ》紙の記者
サム・レガット	
ネスター・ポルゲイト	同紙の編集長
バンティ・アイアランド	同紙の社主
	《タウンクライア》紙のスポーツ ・デスク
ローズ・クインス	同紙のコラムニスト
エリック・オルダジョン	馬主。官吏
クレメント・ペリサイド	メタヴェイン号のもと馬主
ジョージ・ターカー	パーフリート・エレクトロニクス 社の社長
ジョウ	ダニエルの同僚

血の繋がりというのは、苦勞、絆と宿命的な義務を意味する。

私の妹のホリイは、霜の降りた原の上を鐘が鳴り渡り、希望を抱かせる贈物が魅力的な包装紙に包まれたままで置いてあるクリスマス朝、私より十分遅れてこの世に生まれた。妹のホリイは、この三十年間、ベビィ・ベッドの仲間、じゃれ相手、ボクシングの標的、最高の友人であった。大体、その順序で続いている。

妹のホリイがチェルトナムの競馬場に来て、私が三マイルの固定障害レースに出場すべく出ていくと、検量室とパドックの中間で待ち受けていた。

「キット！」一緒に歩いている騎手仲間のグループの中に私を見つけると、力をこめて呼び、厳しい顔つきでしっかりと私の行く手を遮った。

私が立ち止まった。ほかの騎手たちは岩を避ける流れのように、私たちの両脇をそのまま歩いていった。ふだんは穏やかな妹の顔に緊張によるしわができているのを見ると、私は、用件

を話すいとまを妹に与えずに先に口をきいた。

「いくらか金を持ってるか？」

「えっ？　なぜ？」妹は私の質問を上の方で聞いて、内に秘めた何かの災厄の筋書きに神経を集中していた。

「持ってるのか？」私が重ねて訊いた。

「持ってるけど……用件は……」

「すぐ馬券売場へ行け。持ってる金全部でおれの馬の単勝馬券を買うんだ。八番。さっ、早く行って買え」

「でも、私……」

「行って、買うんだ」私が遮った。「そして、バアへ行って、残ってる金でトリプル・ジンを買う。それから、優勝馬の囲いで俺が行くのを待ってろ」

「ちがうのよ、そんなことじゃなくて……」

私が力をこめて言った、「おまえの悩み事で、おれが勝つのを妨げるようなことをするな」はっと目覚めたように瞬きをし、私のヘルメット、厚地のジャケットの下に着ている勝負服を見、遠ざかって行くほかの騎手たちの後ろ姿を見て、私が言ったことの意味に気づいた。

「いいな？」私が言った。

「いいわ」ごくっとなをのみこんだ。「わかったわ」

「後で」

頷いた。不運、災難による悩みが目に表示されていた。

「おれがちゃんとしてやる」私が約束した。「後で」

ぼんやりと頷いて私に背を向けると、ほとんど無意識にシヨルダー・バッグを開けて金を探し始めた。長年たった今ですら、兄に言われたことをやる。手に負えない難題を解決してもらうために、いまだに兄の所へ来る。結婚して四年にもなるのに、親のいない子供時代に形を整えたそのような行動様式を、二人ともいまだに正常なことと考えている。

私は、あの重大な十分の差で年長になっていたら、彼女にどんな違いをもたらしただろうか、とよく考えることがある。母親的な態度をとったであろうか？ たぶん、姉らしく威張っただろう。自分の方が年下で安心できる、と妹が言っていた。

私は、今度はどのような事柄か知らないにしても、かなりの難題であるらしいのに気づいてはいたが、パドックへ歩いていきながら意識的に頭から振り払った。まず、ニューマーケットから百五十マイルも離れた所へ会いに来たし、妹は車を運転するのが嫌いである。

私は力をこめて首を振り、妹のことを頭から放り出した。これから乗る馬と、非常に厄介な仕事は何よりも最優先することが絶対に必要である。私は本質的には誰の兄でもない。本質的には、障害競馬騎手、キット・フィールディングであって、年によってチャンピオン・ジョッキイになるし、ならない時もあって、自分と同じようなもう一人の騎手と年ごとの栄誉を分かち合っている。事故で骨折しなければトップになり、した時は運命と諦める。

今着ているのは、王制廃止になったヨーロッパのある国の中年の王女の勝負服である。いか

にも女性らしい魅力に溢れる婦人で、磁器の艶やかな表面の細かいひびのよう、美しい肌にならずかに年の影響が表われ始めている。いつものようにクロテンのコートを薄い肩にかけている。つやつやした黒髪が高く盛り上がっている。あっさりした金のイヤリング。私はパドックの芝生を横切って彼女のそばへ行くと、笑みをたたえてお辞儀をし、彼女が差し出した手を軽く握った。

「寒いわね」王女が言った。子音にかすかな訛りがあり、母音は純イギリスの発音で、いつも抑揚がたいへん感じがいい。

私は同意した。

「で、勝つの？」彼女が訊いた。

「運がよければ」

主に目に笑みを浮かべていた。「期待してるわ」

私たちはパドックを回っている彼女の馬を見ていた。色の濃い栗毛が頭を下げており、金色で紋章を刺繍した濃紺の毛布が肩甲骨の辺りから尾までをすっぽり覆っている。王女が山が好きなところから、"ノース・フェイス"と名付けられたその馬は、北壁という名にふさわしく陰気で気難しく扱いにくい馬であった。貧相な馬体で醜く、意地の悪い気分屋である。私は明け四歳の初めての置き障害^{バード}レースで騎乗して以来、五歳、六歳、七歳もハードル・レースで乗って来た。八歳の固定障害の未勝利馬レースから、九歳、十歳の全盛期も騎乗している。気分のいい時はしぶしぶ私の指示に従うし、私は馬の意地の悪い動きを知り尽くしていた。十一歳

になった今でも何をするかわからない厄介者で、跳びの上手な点はネコ以上である。何年もの間に三十八勝を挙げ、そのうち私が騎乗しなかったのは一回だけである。パドックでわざと急に肩を下げて私を振り落としたことが二度あり、私を憤激させた。着地で共に転倒したことが三度あるが、その度に、彼は無傷で立ち上がり、怪我をすることを知らない脚で、絶対に挫けることのない勇氣と勝利への意欲を発揮して猛然と走っていった。私はノース・フェイスを愛し、憎悪しており、彼は例によって一番人気だった。

王女と私が一緒にパドックでそのようにして立っていることはもはや数え切れないくらいに多い。彼女が調教師に預けている馬が二十頭以下になったことはごくまれで、この十年間、私は絶えず彼女の持ち馬に騎乗している。彼女と私はきわめて言葉が少ない会話ながらも完全に意思が疎通する間柄になっていて、私が感じた限りではお互いに相手に信頼感と敬意を抱いている。彼女は私をキットと呼び、私は（彼女の望みに従って）王女と呼んでおり、互いに確固とした深い親密感を抱いているが、それも競馬場内に限られている。たまに競馬場以外の場所で会うこともあるが、そのような時の彼女の態度はかなり堅苦しい。

私たちがしばしば二人だけでパドックに立っているのは、ノース・フェイスの調教師、ウィケム・ハーロウが偏頭痛に悩まされているからである。頭痛は非常に寒い日にはほとんど決まったように起きるので、本当に肉体的な現象なのかもしれないが、同時にそのひどさの程度は、彼の肘かけ椅子とその日のレースが行なわれる競馬場との距離に正比例しているようでもある。ウィケム・ハーロウはロンドンの南に厩舎があり、今では北西にあるチェルトナムへ出かけて

来ることはめったにない。彼は年をとってきていて、絶対に口には出さないが、冬の闇の中を車を運転して家に帰るのが心配なのである。

騎乗合図が発せられて、この頃はウィケムの代理を勤めることの方が多し出先の厩務長ダステイが、ノース・フェイスの毛布をさっと取り、慣れた手付きで足を支えてくれた。

王女が、「好運を」と言い、私は元気よく、「ありがとう」と言った。

障害レースでは、劇場で言うように、「好運を祈る」という意味で、「脚を折れブレイク・ア・レッグ」と言う者は一人もない。現実には脚を折る可能性が充分あるからだ。

ノース・フェイスは極度に機嫌が悪かった。乗ってあぶら鐙に足を入れたとたんになにがわかった。この馬と私の間のテレパシーはいつも特に強く、私は胸の内でもひたすら彼を呪い、文句を言わずに勝つことに専念しろ、と無言で告げて風の強い走路に出たが、心的な対話は続いていた。

私としては、いったんレースが始まったら、勝ちたいという衝動が彼の不機嫌さを押さえ込んでくれるもの、と信じるほかはなかった。ほとんどの場合そうなるのだが、これまでに、彼が意欲を燃やすのが遅すぎた場合が何回もあった。今日のようにいつにも増して焦点の定まらない憎しみを発散している時がそうだ。

優しい言葉をかけたり、軽く叩いて元気づけたり、耳を引っ張ったりしておだてることは、彼の場合はまったく通用しない。そういったことを彼はいっこうに喜ばない。彼が求めているのは意志の戦いであり、私は常にその挑戦に応じている。

点呼を取り、腹帯を締め直している間、七頭の出走馬がスタート地点で輪乗りをしていた。

騎手たちは、十一月の寒風で顔が紫色になりながら、スタートの時間が刻々と迫るのを待つ。障害レースでは抽選も枠順もないので、適当に並んでスターターがタイプを上げるのを見守っている。

そのような手順に対してノース・フェイスは、首を下げ、背を丸め、暴れ馬のように後脚を蹴り上げる、といった反応を示した。ほかの騎手たちが悪態を吐いてノース・フェイスから離れ、スターターが、ずっと後ろへさがれ、と私に言った。

このレースは、賞金よりは栄誉に重きをおいた今日の大レースで、スポンサーの新聞社が最小限の出費で最大限のテレビ放送効果を期待している催しである。ヘサンデー・タウンクライア・トロフィは、毎年、当然ながら土曜日の午後行なわれ、翌朝の《サンデー・タウンクライア》紙で大々的に報道される。スキャンダル記事が追い出されて、自賛的記事や劇的な写真が一面を飾る。騎手フィールディングがスタート前に馬に振り落とされたという劇的な写真を撮られるようなことは絶対に許されない。私は馬を、馬鹿野郎、ごろつき、ブタ、などと罵り、そのような紳士的狀態の下でレースが始まった。

ノース・フェイスはあくまで強情で、走るのを渋り、ゆっくりとスタートして初めの五、六完歩で十馬身も離されてしまった。スタートが、人目につかない遠く離れた隅でなく、スタンドからはっきり見える位置だったのも都合が悪かった。馬は、観衆を喜ばせる余興として、さらに二度、暴れ馬のように後脚を蹴上げたが、チェルトナムの最初の柵に向かいながらそんな真似ができる馬はあまりいない。

馬はよじ登るような恰好でその柵を越えると、着地してからもう少しで止まりかけ、走り始める前にまた後脚を跳ね上げて、肉体的にも精神的にも鞍からの指示に抵抗した。

あと、丸二周。障害が十九。私とほかの馬たちの差は恥ずかしいほどで、しかも次第に広がっていく。私は怒りに満ちた指示を送り続けた——走れ、この野郎、走れ、さもないと犬の餌になるぞ、おれが自分の手で殺してやる、それに、おれを振り落とそうと思っていいたら大間違いだ、おまえは絶対にゴールまでおれを運んで行くんだ、この馬鹿野郎、だから走れ、競走しろ、この間抜けめ、おまえが勝つことが好きなのは自分でもわかってるはずだ、だから、本気で走れ……

私はこのようなことを何回となくやってきているが、今日がいちばんひどかった。二番目の柵で踏み切りの合図を無視して目も当てられないような跳び方をし、次のコーナーをちゃんとギャロップで回ることをあくまで拒否した。

以前に一度、彼がそのような気分にいる時に、私はあえて逆らわず、馬が自分で気分を変えるのを待つことにしたところ、四、五完歩で完全に停まってしまったことがある。辛抱するのが唯一の途であった——馬のしぶとい腹立ちが燃え尽きるのを待つしかない。

次の柵に近づく、その下り勾配を恐れるかのように足を踏ん張ったが、恐れていないのはわかっていた。次の水濠を越えると、首を足まで下げ、背を丸めて着地した。まず、間違はなく騎手を前へ放り出す体勢である。私は彼の手口を熟知しているので身構えていて鞍にとどまったが、そのふざけた動作が終わった時には他馬に三百ヤードも遅れていて、いよいよ時間

がなくなってきた。

馬に対する私の気持ちは、ほとんど憤怒に近いまでに高ぶっていた。その手の施しようのない強情さの故に、またしても楽に勝てるはずのレースに負けることになる。これまでの同じような場合と同様に、私は、この頑固者には二度と、絶対に乗らないぞ、と自分に誓った。どんなことがあっても。絶対に。自分でもそう信じるような気分になっていた。

あたかも、自分の怒り方の度が過ぎたのに気づいた駄々っ子のように、突然、ノース・フェイスが走り出した。上下動の激しかった足運びが滑らかになり、怒りが消えて、結局いつもそうなるのだが、素晴らしい闘志が湧き上がってきた。しかし、私たちは一ハロン半遅れていて、三百ヤード以上も後方から他馬を抜いて勝つということは、理屈の上では、初めから本気で走っていたらそれだけの差をつけて勝てたことを意味している。一マイルを完全に浪費した、あと二マイルで勝たねばならない。不可能だ。

絶対に諦めるな、と人は言う。

二周目を全力疾走して私たちは次第に差を縮めたが、最後から二つ目の柵に向かう時、疲れて他馬に遅れている前の馬との差がまだ十馬身あった。柵を越える時にその馬を抜いた。もはやびりではないが、そんなことは何の意味もない。これまでの長い距離をこなして走り続けている馬がまだ前に五頭いて、最後の上り坂に懸命に挑んでいる。

五頭ともノース・フェイスの前で最後の柵を跳び越えた。彼はその柵を越える時に二十フィートは差を詰めたに違いない。これまでの暴れ馬のような不様な跳び方がまるで別の馬の遊び